

『今昔物語集』における修行者の諸相

——特に卷十二〜卷十五を中心に——

石橋義秀

はしがき	六七
第一章 法華經靈驗譚における修行者	六七
一 修行者の実態(一)——三つの類型と一覽表Ⅰ——	六七
二 法華經靈驗譚と修行者	九〇
Ⅰ ④寺院における修行者	九〇
Ⅱ ⑤山林における修行者	九三
Ⅲ ⑥その他の修行者	一〇〇
三 法華修行者の諸問題	一〇三
Ⅰ 法華經信仰の目的——現世利益と後世菩提——	一〇三
Ⅱ 法華經読誦と数量主義	一〇六
第二章 往生譚における修行者	一〇八
一 修行者の実態(二)——三つの類型と一覽表Ⅲ——	一〇八
二 往生譚と修行者	一一〇
Ⅰ ④寺院における修行者	一一一
Ⅱ ⑤山林における修行者	一一三
Ⅲ ⑥その他の修行者	一一五
おわりに	一二九

『今昔物語集』(本朝・仏法部)には、法華経靈驗譚、往生譚、観音・地藏靈驗譚などが卷十二〜卷十七に組織的に収録されており、そこに見られる信仰の姿や、いざさまは多種多様である。その説話内容・信仰内容について、以前に考察したことがあるが、本稿ではそれら旧稿をふまえ、主として修行者の姿を再検討したい。なお、紙数の関係で特に卷十二〜卷十五の法華経靈驗譚と往生譚を取りあげる。

第一章 法華経靈驗譚における修行者

一 修行者の実態(一)——三つの類型と一覧表I——

『今昔物語集』卷十二の(8)〜卷十四の(8)に法華経の靈驗譚が八十八話特集されている。そのうちA表IⅤに示した七十三話に法華経読誦を中心とする修行者が七十七名登場する。その大部分(七十一名)は出家A僧・尼・沙弥など⁽²⁾であるが、翁和尚・筑前国の女・源兼澄の娘・雑色の男・壬生良門・備前国の盲人(A表IⅤに※印をつけた六名)は在家である。その修行内容は様々であるが、法華経読誦などの善根を修すと記されているものは全てA表IⅤに取りあげた。ただし、親や子など縁者のために法華経書写等の追善供養をおこなう事例は除いた。⁽³⁾一応、我が身のために修行する事例に限定した(もつとも自行より化他に重きを置く篤信の者もみられるが、大多数は自行を重視している)。⁽⁴⁾

まず、修行のありようを概観すると、寺院で修行する場合、寺院にいた者がそこを出て(山林にまじわるなどして)修

行する場合、(寺院に入らず)山林にまじわって修行する場合、俗世間で修行する場合など、その形態は多様である。本章で取りあげる修行者について、一応の分類をおこなうと、④寺院で修行する者(△表I∨修行者名の上にAをつけた二十三名)、⑤山林で修行する者(△表I∨修行者名の上にB・B'をつけた二十九名。ただしB'は寺院にいた者がそこを出て山林で修行する場合を指す)、⑥その他、俗世間で修行する者、および修行場所が明記されていない者(△表I∨修行者名の上に記号のつけない者※印をつけた在家六名を含めて)二十五名)に大別できる。

なお、出典については△表I∨下欄に示したが、『靈異記』によるもの三例(「卷十二の27・29・31」、『極楽記』によるもの一例「卷十四の1」、『性空上人伝』等によるもの一例「卷十二の34」、出典未詳二例「卷十三の12・38」)で、そのほかは全て『法華験記』によっている。

△表I∨

卷十二		修行者		出典	
27	B 一僧(聖人)△吉野の山寺∨	靈下6	〃下10		
29	牟婁の沙弥				
30	尼願西	靈下100	〃下82		
31	永興禪師(南菩薩)	靈下1	〃下83		
32	A 源信僧都△横川∨	験下1	〃下86		
33	B' 増賀聖人△多武峯∨	験中66	〃下87		
34	B 性空聖人△書写山∨	性空伝	験中66		
35	B 睿実持経者(聖人)△神明∨				
36	A 道命阿闍梨△天王寺∨				
37	B' 信誓阿闍梨(聖人)△棚波滝∨				
38	B' 僧円久△愛宕山∨				
卷十三					
39	B 好延持経者(聖人)△愛宕山∨	験上34	〃中49		
40	B 良算持経者(聖人)△金峯山∨				
1	B 修行僧義睿・B' 大峯の持経仙(聖人)	験上11	〃上18		
2	B 葛川の僧・B' 比良山の持経仙(聖人)	〃中44	〃中59		
3	B' 陽勝仙人△金峯山∨				
4	B' 僧法空(仙人・聖人)				
5	B' 僧慶日△菟原∨(聖人)	〃中65	〃上23		
6	B 多々院の持経者(聖人)	〃上32	〃上19		
7	A 僧道栄△西塔∨				
8	A 僧道乘△法性寺∨				
9	理満持経者(聖人)	〃上35			

34 33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10

春朝持経者(聖人)
 一叡持経者・B'僧円善
 A長楽寺の僧・B入定の尼
 A妙達和尚△龍花寺▽
 ※翁和尚
 B'僧仁鏡(聖人)△愛宕山▽
 B'僧光日(聖人)△愛宕山▽
 雲浄持経者(聖人)
 信濃国の盲僧
 B平願持経者(聖人)△書写山▽
 A好尊聖人△石山寺▽
 B'僧長円△葛木ノ峯・金峯山▽
 筑前国の僧蓮照(聖人)
 B仏蓮聖人△国上山▽
 一宿聖人行空
 基燈聖人
 ※筑前国の女(盲女)
 B'僧支常(聖人)△雪彦山▽
 B蓮長持経者△金峯・熊野▽
 B'僧明秀△黒谷▽
 A僧広清△東塔・千手院▽
 備前国の僧
 A僧法寿△西塔▽
 A龍苑の僧
 A僧道公△天王寺▽

驗上 22
 〃上 13
 (未詳)
 驗上 8
 〃下 109
 〃上 16
 〃上 21
 〃上 14
 〃下 91
 〃上 40
 〃中 61
 〃下 92
 〃下 88
 〃中 79
 〃中 68
 〃中 69
 〃下 122
 〃中 74
 〃中 60
 〃中 63
 〃中 64
 〃中 62
 〃中 50
 〃中 67
 〃下 128

22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	10	6	1	卷十四	44	42	41	40	39	38	37	36	35
A僧春命△西塔▽	B'永慶聖人△箕面滝▽	僧安勝	※備前国の盲人	A僧明蓮△法隆寺▽	B僧転乘△金峯山▽	B'僧蓮尊	僧海蓮	A僧行範△東塔・千手院▽	入道覚念	A僧恵増△醍醐寺▽	※壬生良門	A国寺の僧	A無空律師△比叡山▽		A定法寺の別当	A僧講仙△六波羅蜜寺▽	持法聖人	法蓮聖	蓮蔵聖人	※雑色の男	A香隆寺の僧	※源兼澄の娘	僧源尊
〃上 25	〃中 53	〃上 26	〃上 27	〃中 80	〃下 93	〃中 58	〃下 89	〃中 77	〃中 78	〃上 31	〃下 112	驗下 126	(極上) 7		〃上 29	〃上 37	〃上 17	〃上 48	驗上 33	(未詳)	〃中 76	〃下 118	驗上 28

『今昔物語集』における修行者の諸相(石橋)

25	24	23	
A 神奈比寺の聖人	A 僧朝禪 △東塔▽	A 僧頼真 △金勝寺▽	験上 24
〃 上 30	〃 上 36		

二 法華經靈驗譚と修行者

さて、右記の△表ⅠⅤに掲載した修行者は、何らかの形で法華經を受持・信仰しているが、その修行内容は、法華經読誦一行が圧倒的に多く五十五例⁽⁷⁾、法華經読誦と念仏など他の善根の兼修十二例⁽⁸⁾、法華經書写・聴聞・その他十例⁽⁹⁾である。すなわち、次章で取りあげる往生譚に比べ、念仏はほとんどみられず、法華經信仰一色であるのは、この説話群（法華經靈驗譚）の性格から考えて当然のことであろう。

Ⅰ ㊤寺院における修行者

次に、修行者の信仰内容について、具体例をあげて検討していく。

前節で分類した㊤寺院で修行する者（二十三名）についてであるが、㊤山林で修行する者と明確な線を引きにくい面があるけれども、以下のような特色がみられる。

(1) 源信僧都のように道心が深く学徳兼備の修行者〔卷十二の32〕をはじめ、法華經を受持し、日夜に読誦するといふ修行者が多くみられる〔卷十三の7・8・13・20・30・32〕、34、卷十四の6・12・14・18、22〕、25〕。しかし、㊤にはみられない事例、(7) 寺物犯用の罪を造る〔道命阿闍梨・卷十二の36〕・(1) 愛執の過により蛇身を受ける〔僧講仙・卷十三の42〕・(ウ) 悪業を重ねて毒蛇になる〔定法寺の別当・卷十三の44〕・(エ) 銭を隠して蛇身を受ける〔無空律師・卷十四の1〕など、罪

・悪業に関する事例が目につく。ちなみに、(ア) (イ) ずれの場合も左記の如く法華經の靈驗により救済されている。

(ア) 道命阿闍梨は「天王寺ノ別当ト有シ間ニ、自然ラ、寺物ヲ犯用シキ。其ノ罪ニ依テ、浄土ニ生ル、事ヲバ不得スト云ヘドモ、法花經ヲ誦奉リシ其ノ力ニ依テ、三惡道ニ不墮ズシテ……今兩三年畢テ後、親率天ニ可生シ。……」

(イ) 僧講仙は「愛執ノ過」により蛇となったが、それを知った僧等は法華經を書写供養したところ、講仙は蛇身を離れ、浄土に生れることができた。

(ウ) 法定寺の別当は仏物欺用などの罪により毒蛇となったが、妻に法華經を書写供養してもらい、苦を免れた。

(エ) 無空律師は葬式費の錢を天井に隠し、その罪により蛇身を受けたが、それを知った枇杷大臣は法華經を書写供養したところ、無空は蛇身を免れ、極楽に往生することができた。

(2) 右記の例と類似するが、卷十三の初に、香隆寺の僧は「形ハ僧也ト云ヘドモ、三宝ヲ不信ズ、因果ヲ不悟ズシテ、翔フ様只俗ニ不異ズ。常ニ手ニ弓箭ヲ持チ、腰ニ刀劔ヲ帶シテ、諸ノ不善・悪行ヲ好ム。亦、鳥獸ヲ見テハ必ず此レヲ射殺ス、魚肉ヲ見テハ悉ク此レヲ食噉ス。心ニ愛欲深クシテ、常ニ女ニ触レム事ヲ願フ。」という無慚破戒の僧であったが、「法花經ノ寿量一品ヲ持テ、身ノ穢ヲ不撰ズ、毎日ニ必ず一遍ヲ誦シ」臨終に寿量品を誦し「得入無上道 速成就仏身」の文に至る時、「心ヲ静ニシテ失ニケリ」とある。このような破戒僧であっても、法華經を受持すれば利益を得ることができるといふ法華經の靈驗を強調する説話であろうが、そこにみられる信仰内容は宗教的といえるものではない。すなわち、この僧は悪行を好み、悪の限りを尽したが、法華經寿量品を毎日一遍誦し、その善根功德により諸々の罪を帳消しにしようという唯物的な計算を働かせており、そこに宗教的な自覚・反省は全くみられない。

このような造悪無碍の邪説は鎌倉時代に入ってからもおこなわれている。例えば、法然上人の『七箇条制誠』に「念仏門において、戒行なしと号して、専ら姪・酒・肉食を勧め、たまたま律儀を守る者を雜行人と名づけて、弥陀の本願を憑む者、造

悪を恐るることなかれと説くを停止すべき事」（日本思想大系¹⁰『法然・一遍』二三三ページ）とある。

なお、『今昔物語集』巻十五などにみられる悪人往生の事例とは全く異なるものである。

II ⑧山林における修行者

④寺院で修行する者に比べて、⑧山林で修行する者（二十九名）の場合はどうかといえ、——後に詳述するが、世を離れて超自然的な生活を続け、靈験を示す、あるいは呪術的な力を發揮するなどの事例が顕著にみられるようである。

典型的な例は性空聖人（巻十二の34）の靈験譚である。靈験が描写されている部分を紹介する。

性空聖人は「出家シテ、霧嶋ト云フ所ニ籠テ、心ヲ発シテ、日夜ニ法花経ヲ誦誦ス。而ル間ニ、忽ニ、食物絶テ、幽ナル庵ニ居タルニ、戸ノ下ニ自然ラ暖ナル餅三枚有リ。此レヲ食テ日來ヲ経ルニ、飢ノ苦ビ無シ。」

「背振山に移リ法花経ヲ空ニ思エヌ。初メハ山ノ中ニ人無クシテ、心ヲ澄シテ経ヲ読ム間、十余歳許ノ兒童等來テ、同ジ座ニ居テ、共ニ経ヲ読ム。亦、老僧ノ、形凡ニ非ザル、來テ、一枚ノ文ヲ聖人ニ授ク。……」

「（その後、書写山に移リ、日夜に法華経を誦誦したが）山野ノ禽獸馴レ陸テ不去ズシテ、聖人食ヲ分テ与フ。身ニ蟻・虱不近付ズ、全ク願志ヲ発ス事無シ。……」

とある。つまり、性空聖人は修行中に①飢の苦しみが無い、②兒童や老僧が出現（守護）する、③禽獸が馴れ近づく、などの靈験があり、その後も「法花ノ持者トシテ、験、世ニ、彼ニ過ル者不有ジ」と、人々から「靈験あらたかな聖人」と尊ばれ、入滅にいたるまで種々の靈験があったと伝えられている。

そのほか、山林で修行する者のうち、靈験等が明記されている者（十八名）について、その修行内容や靈験を簡略にまとめ、Ⅷ表ⅡⅤに掲載した。その表から明らかであるが、いずれも世俗を離れ、山林で厳しい修行をしており、特

に良算持経者・葛川の僧・陽勝仙人・僧長円・僧玄常などは、穀を断つて菜クサヒラを食う、栗や柚を食とする、さらには断食をするなど、苦行をしている。そのような厳しい修行の結果、呪術的な力を身につける、靈験を示すなど、次の(イ)~(オ)のような事例がみられる。

- (イ) 普賢菩薩・天童・童子・白象(普賢菩薩の化身・鳥獸などが現れ、讃嘆する。〔卷十二の35・37、卷十三の4・16・21・27〕)
- (ロ) 羅刹女・鬼神・童子・熊・鹿・猿・狐・蛇などが供養する(食物を捧げる。〔卷十二の40、卷十三の1・2・4・23〕)
- (ハ) 普賢・文殊菩薩、「強力ノ人」、「大ナル牛」、「怖シ気ナル人」が守護する。〔卷十三の15・19・21・28〕)
- (ニ) 毒薬を食しても死なない。〔卷十二の37〕)
- (ホ) 仙人になり、思うままに見仏聞法ができる。〔卷十三の2・3〕)
- (ヘ) 誦経によって重病を癒す。〔卷十二の35〕)
- (ト) 誦経によって死者をよみがえらせる。〔卷十二の37〕)
- (チ) その他、種々の靈験がある。〔卷十二の39、卷十三の1・5・16・19・21〕)

△表Ⅱ▽

<p>睿実持経者〔卷十二の35〕</p> <p>○日夜に法華経を誦誦していたが、愛宕山で「食物絶ヌレバ、籠ノ土ヲ取テ食テ命ヲ継ギケル……髣ニ、白象来テ、聖人ノ前ニ見ユ。……後ニハ神明ニ移リ住ス。」</p> <p>○藤原公季が痲病にかかったが、睿実の誦経によって平癒した。また睿実は堀川院の重病も誦経により癒すなど、靈験あらたかな持経者として尊ばれた。</p>	<p>○「疾ク死テ、悪業ヲ不造ジ」と思つて、毒薬を食したが「法花経ノ力」によって死ななかつた。</p> <p>○夢に普賢菩薩が現れ、「聖人ノ信力清浄也。」と信誓を讃えた。</p> <p>○信誓は疫病にかかったが、「阿闍梨ヲバ免セ。此レハ法花ノ持者也」という夢をみて回復した。また病死した父母を誦経によってよみがえらせた。</p>
<p>信誓阿闍梨〔卷十二の37〕</p> <p>○日夜に法華経を誦誦したが、「形貞端正ナル童子」が現れ、信誓を讃嘆した。</p>	<p>好延持経者〔卷十二の39〕</p> <p>○愛宕山で毎日法華経を三十部誦誦し、四十余年をすごす。</p> <p>○金峯山より帰る途中、盗人にあい「法花経、我レヲ助ケ</p>

給へ」と祈願し、難をのがれた。

○徳大寺の僧は夢に、好延が「蓮花ニ乗テ西ヲ指テ去ヌ。」とみたが、夢告の通り好延は極楽に往生したのであった。

良算持経者〔卷十二の40〕

○出家して「永ク穀ヲ断チ塩ヲ断テ、山ノ菜・木ノ葉ヲ以テ食トシテ、……日夜ニ読誦シテ、他ノ勤メ無シ。」

○藪の嶽に草庵を結び、十余年籠居したが「鬼神、経ヲ責ムデ、菓・蔬ヲ持来テ、聖人ヲ供養ス。加之、熊・狐・毒蛇等モ皆来テ供養ス。」

大峯の持経仙〔卷十三の1〕

○法華経を貴い声で読誦するが「一ノ巻ヲ読畢テ経机ニ置クニ、其ノ経空ニ踊テ、軸ヨリ標紙ニ至マデ巻返シテ紐ヲ結テ、本ノ如クニ机ニ置ク。……」

○「形端正ナル童、微妙ノ食物ヲ捧テ来テ令食ム。……」

○「多ノ鬼神出来テ、各香花ヲ供養シ、菓子・飲食等ヲ捧テ……礼拝シテ掌ヲ合セテ、次第ニ居ヌ。……」

葛川の僧〔卷十三の2〕

○「穀ヲ断テ菜ヲ食テ」修行していたが、夢に比良山の持経仙に結縁すべしと告げられる。

比良山の持経仙〔同右〕

○「仙人、昼夜ニ法花経ヲ読誦ス。……諸ノ鹿・熊・猿及ビ余ノ鳥獸皆、菓ヲ持来テ、仙人ニ供養シ奉ル。……」

○仙人はもと興福寺の僧であったが、「永ク本寺ヲ出デ、

山林ニ交テ仏道ヲ修行シテ、功至リ徳ヲ重テ、自然ラ仙人ト成ル事ヲ得タリ。……兜率天ニ昇テ弥勒ヲ見奉テ、亦余ノ所々ニ行テ聖者ニ近付ク。……仏ヲ見、法ヲ聞ク事、心ニ任セタリ。……」

陽勝仙人〔卷十三の3〕

○「幼ヨリ道心ノミ有テ余ノ心無シ。亦、永ク睡眠スル事無ク、戯レニ休息ム隙無シ。……自ラ法花経ヲ書写シテ日夜ニ読誦ス。」

○牟田寺に籠り「仙ノ法ヲ習フ。始ハ穀ヲ断テ菜ヲ食フ。次ニハ亦、菜ヲ断テ菓・蔬ヲ食フ。後ニハ偏ニ食ヲ断ツ、……永ク衣食ヲ思ヲ断テ、永ク菩提心ヲ發ス。……」

○「仙ノ道ヲ習ヒ得テ空ヲ飛ブ事自在也、空ニ昇リ地ニ入ルニ障無シ。法花経ノ力ニ依テ、仏ヲ見奉リ法ヲ聞奉ル事、心ニ任セタリ、世間ヲ救護シ有情ヲ利益スル事皆堪タリ」

僧法空〔卷十三の4〕

○「世ヲ厭テ、仙ノ道ヲ求メ」山中の「古キ仙ノ洞」に籠り法華経を読誦していると、「端正美麗ノ女人（羅刹女）出来テ、微妙ノ食物ヲ捧テ持経者ヲ供養ス。……法空、飲食ニ乏シキ事無シ。而ル間、諸ノ鳥・鹿・熊・猿等来テ、前ノ庭ニ有テ常ニ経ヲ聞ク。」

僧慶日〔卷十三の5〕

○菟原に籠居し、日夜に法華経を読誦していたが、「奇異ノ事時々有ケリ。雨降テ極テ暗キ夜、聖人奄ヲ出デ、廁ヘ行ク間ニ、奄ノ内ニ人無シト云ヘドモ前ニハ火ヲ持タル人有リ、

後ニハ笠ヲ着タル人有リ。……或ル時ニハ、飴馬ニ乗レル宿老ノ上達部ト思シキ人、聖人ノ奄ニ來ル。此ヲ誰人ト不知ズシテ行テ見レバ、馬モ無シ、人モ無シ。……」

○「聖人最後ニ臨テ、身ニ病無クシテ、只独り奄ノ内ニシテ、西ニ向テ音ヲ高クシテ法花経ヲ誦誦ス。後ニハ、其ノ定印ヲ結テ定ニ入ルガ如クシテ命絶ニケリ。」(また「馥キ香」や「楽ノ音」などの奇瑞があり「極楽ニ往生シタル人也」と記されている。)

多々院の持経者〔卷十三の6〕

○「山林ニ交テ仏道ヲ修行ス。亦、法花経ヲ日夜ニ誦誦シテ年ヲ積メリ。」

○「命終ル時ニ臨テ、身ニ病無クシテ法花経ヲ誦シテ死ニケリ。」

僧仁鏡〔卷十三の15〕

○「持戒ニシテ犯ス事無シ。亦、深キ山ニ籠居テ一夏ヲ勤メ行フ事十余度也。」

○愛宕山で日夜に法華経を誦誦したが「衣服ヲ不求ズ、食物ヲ不願ズ、破タル紙衣・荒キ布ノ衣ヲ着タリ。……日ノ食ヲ不思ズ、粥一坏ヲ吞テ二三日ヲ過ス。」

○夢の中に獅子や白象が現れるが「此レ、定テ、普賢・文殊ノ護リ給フ也」と知った。

○「年百廿七ニシテ、心不違ズシテ法花経ヲ誦シテ失ニケリ。」老僧の夢に「仁鏡が我レ今、兜率天ノ内院ニ生レテ弥勒ヲ見奉ラムトス」と告げた。

『今昔物語集』における修行者の諸相(石橋)

僧光日〔卷十三の16〕

○梅谷に籠居して「年来法花経ヲ誦誦シテ、専ニ仏道ヲ修行ス。而ル間、靈験掲焉ナル事頻ニ有テ、漸ク其ノ聞エ高ク成ス。……」

○八幡宮に参詣し、法華経を誦誦していると、傍の人は夢に、天童が八人現れ、光日を礼拝し、焼香・散華し讃嘆するとみた。

○「命終ル時ニ臨テ、體ニ法花経一部ヲ誦シ畢テ失ニケリ。」(光日は「必ず浄土ニ生タル人也」と尊ばれている。)

平願持経者〔卷十三の19〕

○書写山に籠り、法華経を誦誦していたが、大風により僧房が倒れ、平願は死にそうになった。「法花経ヲ誦シテ『助け給へ』ト祈リ申ス時ニ、誰トモ不知ヌ強力ノ人出來テ」平願を助け、「極楽ニ往生セムト可願シ」と告げた。

○平願は晩年に諸善根を積み、「若シ、其ノ力ニ依テ極楽ニ可生クハ、今日ノ善根ニ其ノ瑞ヲ示シ給へ」と誓ったところ、「白キ蓮花、其ノ地ニ墮無ク生タリ。」これは「聖人ノ極楽ニ可生キ瑞相」であった。

○臨終に法華経を誦誦し、「西ニ向テ掌ヲ合セテ絶入ヌ。」(平願は「必ず極楽ニ生タル人也」と記されている。)

僧長円〔卷十三の21〕

○「葛木ノ峯ニ入テ、食ヲ断テ二七日ノ間、法花経ヲ誦ス。」夢に八人の童子が現れ、長円を讃嘆する。

○河の水が凍り、渡ることができず、歎いていると、「大

ナル牛（義法）が現れ、無事河を渡ることができた。

○深山の中で道に迷い、助けを求めると、夢に童子が現れ、道を教えてくれるなど「奇特ノ事」が多くあった。

仏蓮聖人〔卷十三の23〕

○国上山で法華経を説誦していたが「自然^{ナラズ}ラ二人ノ童出来レリ、其ノ形皆美也。聖人ニ申シテ云ク、『我等二人有テ、聖人ニ随テ奉仕セムト思フ』ト。……（二人ノ童、聖人ニ奉仕スル事陳無シ。然レバ、聖人、世ヲ不知シテ、少モ瞋ル心無クシテ、只法花経ヲ誦誦ス。）」

僧玄常〔卷十三の27〕

○「玄常、翔ヒ例ノ人ニ不似ズ。衣ハ、紙衣ト木皮也、絹・布ノ類敢テ不着ズ。……亦、一生ノ間、持戒ニシテ、常ニ

ちなみに、⑧山林で修行する者（二十九名）のうち「聖人」と呼ばれている者は、性空聖人を含めて十八名（八表I-V）に明示した卷十二の27・33・34・35・37・39・40、卷十三の1・2・4・5・6・15・16・19・23・27、卷十四の21）を数える⁽¹¹⁾。

「聖人」と呼ばれる修行者は、いわゆる「ヒジリ」と考えてよいが、注(11)に記したように④寺院で修行する者より⑧山林で修行する者に「聖人（ヒジリ）」が多くみられるのは、聖の性格から考えて当然のことである。

聖の性格については諸説があるが、五来重博士は、隱遁性・苦行性・遊行性（回国性・呪術性・世俗性・集団性・勸進性の七つの性格をあげておられる⁽¹²⁾。

山林で修行する者の場合、前述のように断食などの苦行をし、その結果、呪術的な力を身につける、靈験を示すなどの事例がみられ、右の七つの性格のうち、苦行性・呪術性は明らかであるが、隱遁性・遊行性（回国性）もみられ

持齋ス。……」

○雪彦山に籠居し「一百果ノ粟ヲ以テ一夏九旬ヲ過シ、一百果ノ柚ヲ以テ三冬ノ食トシテゾ有ケル。其ノ山、極テ人氣ヲ離レタリ。然レバ、猪・鹿・熊・狼等ノ獸、常ニ来テ、聖人ニ近付キ戯レテ、敢テ恐ルム氣無シ。……」

蓮長持経者〔卷十三の28〕

○蓮長は一月に法華経千部を説誦したが、それを不審に思った人が夢に「怖シ氣ナル人四人有リ、皆甲冑ヲ着シ天衣ヲ具セリ。各、手ニ鉾・劔等ヲ取レリ、蓮長持経者ノ前後・左右ニ相副テ、時ノ間モ不離ズ」とみて、疑いの心をとどめた。
○蓮長は臨終に「手ニ鮮カニ白キ蓮花ヲ持タリ。」入滅の後、蓮華は忽に失せた。

る。

隠遁性については後に詳しく述べることにし、遊行性(回国性)について触れておく。⑧(山林で修行する者)の場合、山林にとどまって修行する者が多いが、山岳霊場をめぐる山伏的聖もみられる。典型的な例は、修行僧義睿で、「諸ノ山ヲ廻リ海ヲ渡テ、国々ニ行キ所々ノ霊験(所)ニ参テ、行ヒケリ。而ルニ、熊野ニ参テ、其レヨリ大峯ト云フ山ヲ通テ金峯ニ参リ……」〔卷十三の1〕とあるのをはじめ、僧長円〔卷十三の21〕・蓮長持経者〔卷十三の28〕も熊野・大峯・金峯などの霊験所をめぐる修行したのである。

そのほかに、霊験所をめぐる山伏的聖ではないが、修行地を移り変える者(霧島↓背振山↓書写山〔性空聖人・卷十二の34〕、愛宕山↓神明↓鎮西〔睿実持経者・卷十二の35〕、梅谷↓愛宕山〔僧光日・卷十三の16〕)、結縁のため(一時)葛木山や比良山に行く者(僧円久〔卷十二の38〕・葛川の僧〔卷十三の2〕)などがあり、山林・山寺にとどまって修行する者にも遊行回国性が見とめられる。

最後に、聖の隠遁性についてであるが、五来博士は「比叡山・高野山・東大寺・興福寺などの周辺に多くの別所があつて、本寺の研学や修業の課程から脱落した念仏者や、みづから念仏往生をねがう僧や聖が隠遁した」¹³⁾別所聖を問題にしておられる。『今昔物語集』の場合、A表IVの修行者名の上にB'をつけた十六名のうち、別所に隠遁したと考えられるのは僧明秀〔卷十三の29〕のみで、その他の者は山林に隠遁している。その修行者名および本寺・隠遁地(へ)内の上が本寺、下が隠遁地である)、隠遁の動機(「内にしめす)は次の通りである。

- (1) 増賀聖人(へ)比叡山・横川↓多武峯↓「道心堅固ニ^{オコシ}発ニケレバ、現世ノ名聞・利養ヲ永ク棄テ、偏ニ後世菩提ノ事ヲノミ思ケル間ニ、……」〔卷十二の33〕

『今昔物語集』における修行者の諸相(石橋)

- (2) 信誓阿闍梨「ハ比叡山↓棚波滝」堅固ニ道心発ケレバ、永ク現世ノ名聞・利養ヲ棄テ、偏ニ後世ノ仏果・菩提ヲ願ヒケリ。
……」〔卷十二の37〕
- (3) 僧円久ハ比叡山・西塔↓愛宕山・南星ノ谷「道心ヲ発シテ、偏ニ世ノ栄花ヲ棄テ、……」〔卷十二の38〕
- (4) 大峯の持経仙ハ比叡山・東塔↓大峯「三昧ノ座主ニ依テ勘当シ給ヒシカバ、……」〔卷十三の1〕
- (5) 比良山の持経仙ハ興福寺↓比良山「菩提心をおこし」『寂寞無人声 読誦此經典 我尔時為現 清淨光明身』ノ文ヲ見シヨリ
……」〔卷十三の2〕
- (6) 陽勝仙人ハ比叡山・西塔↓金峯山「堅固ノ道心発テ……」〔卷十三の3〕
- (7) 僧法空ハ法隆寺↓東国の「人跡絶タル山」世ヲ厭テ、仙ノ道ヲ求メムト思フ心忽ニ発テ……」〔卷十三の4〕
- (8) 僧慶日ハ比叡山↓菟原「道心盛ニ発テ……」〔卷十三の5〕
- (9) 僧円善ハ比叡山・東塔↓熊野「動機不明」〔卷十三の11〕
- (10) 僧仁鏡ハ東大寺↓愛宕山・大鷲峯「淨キ所ヲ尋テ、最後ノ棲ト為ムト思フニ……」〔卷十三の15〕
- (11) 僧光日ハ比叡山・東塔↓梅谷↓愛宕山「動機不明」〔卷十三の16〕
- (12) 僧長円ハ比叡山↓葛木ノ峯↓熊野・大峯・金峯「動機不明」〔卷十三の21〕
- (13) 僧玄常ハ比叡山↓雪彦山「動機不明」〔卷十三の27〕
- ※(14) 僧明秀ハ比叡山・西塔↓黒谷別所「道心発テ……」〔卷十三の29〕
- (15) 僧蓮尊ハ元興寺↓美作国「動機不明」〔卷十四の16〕
- (16) 永慶聖人ハ比叡山・横川↓箕面滝「動機不明」〔卷十四の21〕

山林に隱遁した者（右記の14僧明秀を除く十五名）の本寺は、比叡山が多く（十一名）、その他は南都の寺院（興福寺・法隆寺・東大寺・元興寺）である。隱遁の動機が明記されているもの（九例）のうち、堅固に道心をおこし、現世の名聞・利養を捨てて（後世菩提を願って）本寺を離れる者、いわば宗教的な自覚によって隱遁する者が四例（1）増賀聖人・（2）信誓

阿闍梨・(3)僧円久・(8)僧慶日)みられる⁽¹⁴⁾。これらの修行者は、中世の説話集(『発心集』や『撰集抄』など)に描かれている遁世者と同一に談ずることはできないが、出家して入った比叡山や南都の世俗化した寺院を離れることにより、仏道修行に励むことができると考えたのであり、遁世者の先駆けをなすものといえよう。「二三ページハ補注V参照」

特に注意すべきは増賀のいき方である。増賀は叡山を去って多武峯に籠居し修行しようと思ったが、師の座主(慈惠大僧正)に反対され、氣狂いのふりをする(「狂氣ヲ翔フ也」。すなわち、一般に僧供を受ける場合、下僧を遣わすが、増賀は自ら黒くけがれた折櫃をさげて僧供を受け、房に持ち帰らないで人夫たちと道に居並び、木の枝を箸にして食べた。人々はそれをみて「此レハ只ニハ非ズ、物ニ狂フ也」と敬遠した。このように常に狂気をふるまうので、座主も「如然ク成リナム者ヲバ今ハ何カハ為ム」という。それを聞いて増賀は多武峯に籠居し静かに修行した。しかし増賀は「貴キ聖人也」という評判が高くなり、宮中より護持僧として召されるが、「様々ノ物狂ハシキ事共ヲ申シテ」逃げ帰ったとある。その後「如此ク、事ニ触レテ狂フ事ノミ有ケレドモ……」と記されるが、このように増賀が氣狂いじみた行動に終始するのは何故であろうか。『今昔物語集』の編者は、その奇行に対し特に解説を加えることはしないが、同類話を収録する『発心集』(第一一五の末尾)に「此の人のふるまひ、世の末には物狂ひとも云ひつべけれども、境界離れたための思ひばかりなれば、其れにつけても、ありがたきためしに云ひ置きけり⁽¹⁵⁾。」と長明が説き明かしている。つまり、増賀は仏道を求めて出家したが、周知の通り比叡山は世俗化しており、名聞利養を追い求める者が多かった。増賀は心ならずも、その名利の渦中にまぎこまれそうになり、その境界を離れるために、わざと氣狂いのまねをしたのである。叡山を離れ多武峯で修行している増賀に対し、宮中から召しがあるなど、名利の渦から逃げることはできないが、増賀は物狂いを繰り返し、人を遠ざけて純粹な信仰生活をつらぬこうとしたのである。このよ

うに、本心からではなく、仮りに物狂いをするを隠徳あるいは偽悪、というが、高德の僧がわざとその徳を隠したり、善人が悪人であるかの如く見せかけたりする話は、『発心集』など中世説話集によくみられる。『今昔物語集』の法華経靈驗譚に一例ではあるが、中世的な信仰内容をもつ話が登場することは注意しなければならない。

III ③その他の修行者

①寺院で修行する者、②山林で修行する者のほかに、③俗世間で修行する者、および修行場所が明記されていない者が（在家六名を含めて）二十五名みられる。そのうち、聖人・聖と呼ばれる者は九名（八表ⅠⅤに明示した卷十三の9・10・17・22・24・25・39・40・41）を数える。前述の②（山林で修行する者）の場合、遊行回国性もみられたが、隠遁性が顕著であった。それに対して③の場合は、次の内容からも知られる通り、遊行回国性が強くみられる。

(1) 理満持経者「日夜ニ法花経ヲ読誦シテ棲ヲ不定ズシテ、所々ニ流浪シテ仏道ヲ修行スル程ニ、……大江ニ行居テ、船ヲ儲テ渡子トシテ諸ノ往還ノ人ヲ渡ス態ヲシケリ。亦、或ル時ニハ、京ニ有テ、悲田ニ行テ、万ノ病ニ煩ヒ惱ム人ヲ哀テ、願フ物ヲ求メ尋ネテ与フ。……」〔卷十三の9〕

(2) 春朝持経者「日夜ニ法花経ヲ読誦シテ、棲ヲ不定ズシテ所々ニ流浪シテ、只、法花経ヲ読誦ス。心ニ人ヲ哀ムデ、人ノ苦事ヲ見テハ我が苦ト思ヒ、人ノ喜ブ事ヲ見テハ我が楽ビト思フ。（罪人の苦を抜かんがために、ことさらに罪を造って入獄し、法華経を誦して罪人に聞かせた）」〔卷十三の10〕

(3) 雲浄持経者「『国々ニ行テ、所々ノ靈験ヲ礼マム』ト思テ、熊野ニ詣ルニ、（志摩の海辺の巖洞に宿り、法華経を誦して毒蛇の難を免れた。また毒蛇も誦経の功德で救われた）」〔卷十三の17〕

(4) 僧蓮照「若ヨリ法花経ヲ受ケ習フ、昼夜ニ読誦シテ他ノ思ヒ無シ。亦、道心深クシテ人ヲ哀ブ心弘シ。裸ナル人ヲ見テハ、我が衣ヲ脱テ与ヘテ寒キ事ヲ不敷ズ、餓タル人ヲ見テハ、我が食ヲ去テ施シテ、食ヲ求ル事ヲ不願ズ。亦、諸ノ虫ヲ哀テ多ノ蚤・虱ヲ集メテ我が身ニ付テ飼フ。……」〔卷十三の22〕

(5)一宿聖人行空「若ヨリ法花経ヲ受ケ習テ、昼ル六部、夜ル六部、日夜ニ十二部ヲ誦スル事ヲ不欠ズ。出家ノ後、住所ヲ不定シテ一所ニ二宿スル事無シ。……亦、三衣一鉢ヲソラ不具ズ。況ヤ、其ノ外ノ物ヲ貯ル事有ムヤ。只、身ニ随ヘル物ハ法花経一部也。五幾七道ニ不行至ザル所無ク、六十余国ニ不見ル国無シ。……」〔卷十三の24〕

(6)基燈聖人「若クシテ法花経ヲ受ケ習テ、日夜ニ誦誦シテ身命ヲ不惜ズ……哀ノ心深クシテ智リ弘シ。草木ニ付テモ此レヲ敬ヒ、何況ヤ、生類ヲ見テハ仏ノ如クニ礼拜ス。……」〔卷十三の25〕

※卷十三の39～41の三話は、法華経の威力・靈験が他の経・垂厳経・最勝王経・金剛般若経よりすぐれている、殊勝であるということを記すのが目的で、蓮藏聖人・法蓮聖・持法聖人の修行内容等は明記されていない。

右記の(1)・(2)・(3)・(5)などに、修行場所を定めず、各地を流浪・遊行したことが明記されているが、注意すべきはほとんどの者が自分のために法華経を誦誦する(『自行』)とともに、他人のために布施行をする(『化他』)という両面を兼ね備えているという点である。

聖人・聖と呼ばれる者のほかに、「山寺・里ニ往返シテ棲ヲ不定ズ」常に法華経を誦誦した翁和尚〔卷十三の14〕や、立山・白山ほか国々の靈験所をめぐった海蓮〔卷十四の15〕など、遊行回国の聖に類する者もみられる。

最後に、◎二十五名の居住地について明記されているもの(国名)を記すと、紀伊〔卷十二の29、同31〕・加賀〔卷十三の14〕・信濃〔卷十三の18〕・筑前〔卷十三の22〕・周防〔卷十三の25〕・筑前〔卷十三の26〕・備前〔卷十三の31〕・加賀〔卷十三の36〕・信濃〔卷十三の38〕・出雲〔卷十三の39〕・陸奥〔卷十三の40、卷十四の10〕・越中〔卷十四の15〕・備前〔卷十四の19〕で、地方在住者が多数を占めている。④寺院で修行する者の場合、比叡山や南都寺院など畿内中心であるのと対照的である。

三 法華修行者の諸問題

前節においては、法華經読誦を中心とする修行者を、④寺院で修行する者・⑤山林で修行する者・⑥その他、に分けてそれぞれの特色を概観した。④・⑤・⑥に表面的には異なる点もみられるが、内面的には区別できない共通点もある。本節では、法華經受持者全般にかかわる問題を取りあげることにした。

I 法華經信仰の目的——現世利益と後世菩提——

先ず、法華經受持者の目的とすると何であつたのか、整理しておこう。

いうまでもなく法華經は靈驗あらたかな經典であり、現当三世に利益があると信じられたが、人々の願いにも現当両面があるように思われる。

第一に現世利益を願う事例であるが、卷十四の(9)に、美作国の鉄掘人が坑内に閉じこめられ、「我レ、先年ニ、法花經ヲ書写シ奉ラムト思フ願ヲ発シテ、未ダ不遂ズシテ、忽ニ今、此難ニ会ヘリ。速ニ、法花經、我レヲ助ケ給ヘ。若シ、我レヲ助テ命ヲ存シタラバ、必ず仏ヲ写シ經ヲ書カム」と祈念すると、「一ノ若キ僧、狭キ隙ヨリ入来テ、食物ヲ持来テ、我レニ授ク。此レヲ食ニ、餓ヘノ心皆直ス。……其ノ後不久ズシテ、此ノ穴ノ口、人不掘ズシテ自然ラ開キ通リス。……」とある。すなわち、急難に遭つて法華經に助けを求め、その利益を得たのである。

このほかにも現世の利益を願う事例は卷十二の39・卷十三の19にみられる。ただし、両方とも現世利益を窮極の目的としてゐるのではないようである。(a)好延持經者は奈良坂で盗人に遭い、「法花經、我レヲ助ケ給ヘ」と叫ぶと、盗人は「人ノ来テ捕ヘムトセム如クニ、持經者ヲ棄テ、皆逃テ去ヌ。」〔卷十二の39〕とあり、急難に遭つて法華經に助けを求めたのであるが、好延

は極楽往生を遂げており、現世利益が最終目的ではない。(b)平願持経者は大風により僧房が倒され、死にそうになり、法華経を誦し、「助け給へ」と祈願すると、「強力ノ人(護法)」が現れ、救出した〔卷十三の19〕とあるが、晩年「我レ、法花ヲ持テ年ヲ積メリ。若シ、其ノ力ニ依テ極楽ニ可生クハ、今日ノ善根ニ其ノ瑞ヲ示シ給へ」と誓ったところ、願ひ通り瑞相を得、さらに往生を遂げたという。この場合も(a)と同様、現世利益が最終目的ではない。

(a)(b)の事例からも見当がつくが、法華経受持者の目的とするところは、多くの場合、現世よりも後世にあったようである。つまり、翁和尚は「我レ、年来、法花経ヲ持チ奉ル。此レ、現世ノ福寿ヲ願フニ非ズ、偏ニ後世菩提ノ為也。」「卷十三の14」というように、後世菩提を願って法華経を受持したのである。同様の例として、

○増賀聖人は「道心堅固ニ発ニケレバ、現世ノ名聞・利養ヲ永ク棄テ、偏ニ後世菩提ノ事ヲノミ思ケル間ニ……」〔卷十二の33〕

○信誓阿闍梨は「堅固ニ道心発ケレバ、永ク現世ノ名聞・利養ヲ棄テ、偏ニ後世ノ仏果・菩提ヲ願ヒケリ。」「卷十二の37〕

○僧広清は「道心有テ、常ニ後世ヲ恐ル、心有リ。事ノ縁ニ被引レテ、世路ニ廻ルト云ヘドモ、只隠居ヲ好ム心ノミ有リ。日夜ニ法花経ヲ誦シテ、願クハ、此ノ善根ヲ以テ菩提ニ廻向ス。」「卷十三の30〕

○入道覚念は「一生ノ間、毎日ニ(法華経)三部ヲ誦誦シテ闕ク事無シ。永ク現世ノ名聞・利養ヲ棄テ、偏ニ後世ノ無上菩提ヲ願ヒケリ。」「卷十四の13〕

○僧明蓮は「願クハ、我レニ世々ニ諸仏ヲ見奉リ、生々ニ法花経ヲ聞キ奉テ、常ニ不退ノ行ヲ修シテ速ニ無上菩提ヲ証セム」と発願した。〔卷十四の18〕

などとあり、いずれも後世菩提を願って法華経を受持している。つまり、法華経受持者の多くは、後世で仏果を得る(成仏する)ことを願っていたといえよう。ただし、仏果を証するに至るまでの過程は人により異なるようである。

○僧明秀は四十になって道心をおこし、黒谷に籠居し法華経を誦誦していたが、病気になり「既ニ死ナムトス。最後ニ、明秀ノ、手ニ法花経ヲ取テ誓ヲ発シテ云ク、『無始ノ罪障我ガ身ニ薰入シテ、今生ニ全ク定恵ノ行業闕ヌ。何ノ因縁ヲ以テカ、我レ極楽ニ生レム。僅ニ法花経ヲ誦スレバ、心乱テ法ノ如クニ非ズ。然ト云ヘドモ、此ノ善根ヲ以

テ善知識トシテ、死テ後、屍骸・魂魄也ト云フトモ尚、法花ヲ誦シ、中有・生有也ト云フトモ專ニ法花ヲ誦シ、若ハ悪趣ニ墮^{オテ}タリトモ、若ハ善所ニ生^{ウツレ}タリトモ、常ニ此ノ經ヲ誦シ、乃至、仏果ニ至マデモ只此ノ經ヲ誦セム』ト誓テ、即チ、死ヌ。葬シテ後……（墓所に）法花經ヲ誦スル音有り、吉ク聞ケバ、明秀ガ生^{イキ}タリシ時ニ誦セシ音ニ似タリ。…最後ノ誓ヒニ不違ネバ極テ貴シトゾ人云ケルトナム語り伝ヘタルトヤ。』〔卷十三の29〕とあり、このように、あくまでも法華經を受持して仏果を得ようという意志堅固な人もみられる。

しかし、左記のように、「A」極楽浄土に生れ、阿弥陀仏の教えを聞いて修行し、（記別を受けて）成仏しよう、あるいは「B」兜率天に生れ、そこで修行し（弥勒菩薩が下生して成仏せられる時、弥勒と一緒にこの土に下生し、その説法を聞き、記別を受けて）、その後、成仏しようとした例が多いようである。

「A」極楽浄土に生れて成仏しようと願った例について述べると、神奈比寺の聖人は日夜に法華經を誦誦していたが「願クハ、今生ニ法花ヲ誦スルカニ依テ、人界ヲ棄テ、淨土ニ生レテ菩提ヲ証セム」と誓った〔卷十四の25〕とあり（最終の目的は仏果を得ることであったが）、成仏するために、先ず往生極楽が願われたのである。また「法花經ヲ年来誦誦スルカニ依テ、淨土ニ生レヌル人也」と尊ばれた翁和尚も日頃から後世菩提を願い、臨終には寿量品の偈「每自作是念 以何令衆生 得入無上道 速成就仏身」を誦して往生した〔卷十三の14〕とあり、窮極の目的は、（往生ののち）成仏することであったといえよう。

このほかにも法華經を受持して往生を願った例は、源信僧都〔卷十二の32〕・増賀聖人〔卷十二の33〕・好延持經者〔卷十三の39〕・僧慶日〔卷十三の5〕・僧道乘〔卷十三の8〕・理滿持經者〔卷十三の9〕・妙達和尚〔卷十三の13〕・僧光日〔卷十三の16〕・平願持經者〔卷十三の19〕・基燈聖人〔卷十三の25〕・僧玄常〔卷十三の27〕・僧法寿〔卷十三の32〕・僧源尊〔卷十三

の35]・持法および持金聖人〔卷十三の41〕・国寺の僧〔卷十四の6〕・永慶聖人〔卷十四の21〕・僧頼真〔卷十四の23〕など、数多くみられるが、いずれも極楽に往生し、仏果を得ることが窮極の目的であった。

〔B〕兜率天に上生しようとした例について述べると、僧道榮は「今生ハ徒ニ過ナムトス、後世ノ貯無クハ、此レ二世不得ノ身也。然レバ、法花経ヲ書写シ奉ラム」と思い、熱心に書写供養をしていたが、夢に自分の書写供養した経が宝塔の内に充滿しており、「汝デ、速ニ此ノ塔ヲ具シ奉テ兜率天ニ可生シ」と告げられ、そののち、兜率天に上生するためにいよいよ書写供養に励んだ〔卷十三の7〕とあるのをはじめ、道命阿闍梨〔卷十二の36〕・僧円善〔卷十三の11〕・僧仁鏡〔卷十三の15〕・僧安勝〔卷十四の20〕など、法華経を受持して兜率天に上生した例は少なくない。ただし兜率天に上生しても、そこですぐ成仏できるのではなく、前述のように、弥勒菩薩について修行し、弥勒出世の暁に〔弥勒と一緒に〕この土に下生し、その説法を聴いて〔記別を受けて〕成仏するのである。従って、兜率天に上生することは仏果を証するに至る一過程にすぎないのである。⁽¹⁸⁾

以上、法華経受持者の多くは、後世菩提——後世で仏果を得る（成仏する）ことを窮極の目的としたが、そのために〔A〕極楽往生、あるいは〔B〕兜率天上生を願ったことが知られる。

なお、卷十三の2に、もと興福寺の僧・蓮寂は、「山林ニ交テ仏道ヲ修行シテ、功至リ徳ヲ重テ、自然ラ仙人ト成ル事ヲ得タリ。今宿因有テ此ノ洞ニ来レリ。人間ヲ離レテ後ハ、法花ヲ父母トシ、禁戒ヲ防護トシテ、一乗ヲ眼トシテ遠キ色ヲ見、慈悲ヲ耳トシテ諸ノ音ヲ聞ク。亦、心ニ一切ノ事ヲ知レリ。亦、兜率天ニ昇テ弥勒ヲ見奉テ、亦余ノ所々ニ行テ聖者ニ近付ク。天魔・波旬モ我が辺ニ不寄ズ。怖畏・災過モ更ニ不聞ズ。仏ヲ見、法ヲ聞ク事、心ニ任セタリ。」とある如く、修行して仙人になる話がみられる。蓮寂は仙人になって見仏聞法し、修行したのであるが、最終目的は仏果を得ることであった。従って、この場合は、成仏する前段階として仙人になることを願ったのである。類例は卷十三の1・3・4にみられる。

II 法華經読誦と数量主義

次に問題にしたいことは、法華經受持者（修行者）たちは法華經を数多く読誦することを理想としている点である。典型的な例は好延持經者である。

好延持經者は愛宕山で「師ニ隨テ法花經ヲ受ケ持テ、毎日ニ卅部ヲ讀誦シテ、此ノ山ニシテ四十余年ヲ過ス。」〔卷十二の39〕とあるが、信じられないほど数多くの法華經読誦に没頭している。好延持經者のほかに、読誦の數量を重要視した事例は次の通りである。

- ・ 理滿持經者、法華經二万余部読誦〔卷十三の9〕
- ・ 一宿聖人行空、三十余万部読誦〔卷十三の24〕
- ・ 基燈聖人毎日三十余部読誦〔卷十三の25〕
- ・ 蓮長持經者、一月千部読誦〔卷十三の28〕
- ・ 備前国の僧、二万余部読誦〔卷十三の31〕
- ・ 僧春命、六万部読誦〔卷十四の22〕
- ・ 僧頼真、六万部読誦〔卷十四の23〕

そのほか、數量は明示しないが、良算持經者は薊の嶽に籠り「日夜ニ法華經ヲ讀テ十余年ヲ經タリ。……人來テ語ヒ問フ事有ト云ヘドモ不答ヘズ、只經ヲ誦ス。亦、眠レル時モ尚、眠乍ラ經ヲ讀ム音有リ。」〔卷十二の40〕と法華經読誦に徹している。

法華經を毎日そのように多く読誦しようと思えば、その意味内容を味わっている余裕はないはずである。持經者の中には、僧広清のように「法花經ヲ受ケ習テ、其ノ義理ヲ悟テ、常ニ読誦ス。」〔卷十三の30〕という者も数例⁽¹⁹⁾みられ

るが、たいていの者は法華經の教義や意味内容を知らなくても、法華經自体に尊い功德があると信じて、ひたすら読誦すればよいと考えていたようである。要するに、法華經・分別功德品などに法華經を受持し読誦する者の功德が説かれていたが、人々はそれを表面的に理解した結果、法華經読誦を重要視し、たとえ形式的であっても、数多く読むことにいそしんだのである。

ところで、法華經を讀誦すると、その善根功德は金銀泥の經卷、あるいは宝塔という形で累積されるという説話がある。少し長くなるが引用する。

今昔、法性寺ノ尊勝院ノ供僧ニテ道乗ト云フ僧有ケリ。比叡ノ山ノ西塔ノ正算僧都ノ法弟トシテ、初ハ比叡ノ山ニ住ケルガ、後ニハ法性寺ニ移テ年来ヲ經タリ。若ヨリ法花經ヲ讀誦シテ、老ニ至ルマデ怠タル事無カリケリ。但シ、極テ心僻ミテ、時々童子ヲ罵リ罰ツ事ゾ有ケル。而ル間、道乗、夢ニ「法性寺ヲ出デ、比叡ノ山ニ行クニ、西坂ノ柿ノ木ノ本ニ至テ、遙ニ山ノ上ヲ見上グレバ、坂本ヨリ初メテ大嶽ニ至ルマデ多ノ堂舎・樓閣ヲ造リ重ネタリ、瓦ヲ以テ葺キ金銀ヲ以テ莊レリ。其ノ中ニ、多ノ經卷ヲ安置シ奉レリ。黄ナル紙・朱ノ軸、紺ノ紙・玉ノ軸也、皆金銀ヲ以テ書タリ。道乗、此レヲ見テ、『例ニ非ズ。此ハ何ナル事ゾ』ト思テ、年ノ老タル僧ノ有ルニ向テ、問テ云ク、『此ノ經極テ多クシテ計ヘ不可尽ズ。此レ誰人ノ置ケルゾ』ト。老僧答テ云ク、『此レハ、汝ガ年来讀誦セル所ノ法花大乘也。……此ノ善根ニ依テ、汝、淨土ニ可生シ』ト。道乗、此レヲ聞テ、『奇異也』ト思フ間ニ、俄ニ火出来テ一部ノ經焼ヌ。道乗、此レヲ見テ、老僧ニ問テ云ク、『何ニ依テ、此ノ經ハ燒ケ給ヒヌルゾ』ト。老僧答テ云ク、『此レハ、汝ガ瞋恚ヲ發シテ童子ヲ勘当セシ時ニ讀誦セシ經ヲ瞋恚ノ火ノ燒ツル也。然レバ、汝ヂ、瞋恚ヲ断テバ、善根弥ヨ増テ必ズ極楽ニ參ナム』ト云フ』ト見テ、夢覺ヌ。……〔卷十三の8〕

とある。この説話から、法華經を讀誦することは立派な善根であり、それは金銀泥の經卷として累積されるが、逆に瞋恚をおこすと、その善根は差し引かれると信じられていたことがわかる。同類の話は、卷十三の(6)に、多々院の持經者は蘇生した俗人より、法華經を讀誦すると宝塔が出現し、瞋恚をおこすと宝塔が焼かれると告げられ、弟子童子

を捨てて法華經読誦に専念したとある（その他、卷十三の7・36にも類話が見られる）。

要するに、持経者たちは、法華經を読誦することは往生・成仏のための最高の善根と信じ、しかもその善根は数量的に多大であればあるほど往生・成仏のために有効な働きがあると考え、ひたすら読誦に励んだのである。なお、法華經読誦に専念するため、また往生の障害になる瞋恚をおこさないためにも、人里はなれた山林・山寺に籠って修行する者が多かったといえよう。

第二章 往生譚における修行者

一 修行者の実態(二)——三つの類型と一覧表Ⅲ——

『今昔物語集』卷十五に、往生譚が五十四話特集されている。いうまでもなく、その大部分（五十二話）は阿弥陀仏の極楽浄土に往生する話（極楽往生説話）であるが、弥勒菩薩の兜率天の内院に上生する話（兜率天上生説話）が二話〔第45・46話〕みられる⁽²⁰⁾。

左記△表ⅢVに示した通り卷十五〔第1～54話〕に六十一名の修行者が登場するが、そのうち出家△僧・尼、沙弥、入道など▽が四十八名であるのに対し、在家は十二名である（△表ⅢVに※印をつけた第42～45話、第47～54話）。なお▲印をつけた摂津国の樹上の人（第25話）は、出家か在家か不明である。第一章で取りあげた法華修行者の場合、大部分（七十一名）は出家で、在家は六名にすぎないのに比べると、卷十五の場合、出家に対する在家の割合が多い。また注（21）に記した通り、出家の内訳は、僧（二十九名）に対し、尼（六名）・沙弥（六名）・入道（七名）の割合が多くなってい

13	A 僧真頼 △石山寺▽	極	20	高階良臣（入道）	極
14	観幸入寺（聖人）	（未詳）	35	高階成順（乘蓮入道）	極
15	僧長増	（未詳）	36	小松天皇の孫の尼	極
16	A 千観内供 △比叡山▽	極	37	寛忠僧都の妹の尼	極
17	A 僧平珍 △法広寺▽	〃	38	伊勢国飯高郡の尼	〃
18	A 僧増祐（聖人）△如意寺▽	〃	39	源信僧都の母の尼	（未詳）
19	A 僧玄海 △小松寺▽	〃	40	尼釈名	（未詳）
20	A 沙弥薬連 △如法寺▽	〃	41	筑前国の流浪の尼	（未詳）
21	A 僧広道 △大日寺▽	〃	42	※義孝小将	（未詳）
22	雲林院の聖人	（未詳）	43	※丹波中将雅通	（未詳）
23	丹後国の聖人	（未詳）	44	※越智益躬	（未詳）
24	鎮西の聖人	（未詳）	45	※藤原仲遠	（未詳）
25	▲摂津国の樹上の人・B 修行僧	極	46	阿武大夫（修覚入道）	（未詳）
26	沙弥教信・A 勝如聖人△勝尾寺▽	〃	47	※悪業を造りし人	（未詳）
27	B 北山の餌取法師・B 延昌	〃	48	※彦真の妻	極
28	B 餌西の餌取法師・B 修行僧	（未詳）	49	※藤原佐世の妻	〃
29	沙弥尋寂・A 僧撰門 △比叡山▽	験中	50	※女の藤原氏	〃
30	沙弥薬延・A 無動寺の聖人	〃	51	※伊勢国飯高郡の嫗	〃
31	A 入道真覚 △比叡山▽	極	52	※加賀国の女	〃
32	A 入道尋祐 △松尾山寺▽	〃	53	※近江国坂田郡の女	〃
33	源憩（入道）	〃	54	※観峯威儀師の従童	（未詳）

二 往生譚と修行者

右記の△表Ⅲ▽に掲載した修行者は、いずれも極楽往生（あるいは兜率天上生）を願って善根を積んでいるが、その修

行内容は、念仏一行が多く、二十八例⁽²²⁾、念仏と法華經の兼修八例⁽²³⁾、念仏と他の善根の兼修六例⁽²⁴⁾、法華經読誦一行二例⁽²⁵⁾、法華經と他の善根の兼修四例⁽²⁶⁾、その他(念仏・法華經以外)の善根五例⁽²⁷⁾、行業が明記されないもの八例⁽²⁸⁾である。第一章の法華修行者の場合は、念仏はほとんどみられず、法華經読誦が圧倒的に多かったが、卷十五の場合は、念仏が中心であり、法華經読誦一行は少なく、念仏などとの兼修の形で附随的にみられるにすぎない。

I ④寺院における修行者

さて、修行者の信仰内容について検討する。④寺院で修行する者二十三名の大部分は、僧二十名。他は沙弥一名、入道二名であるが、多くは南都の寺院や比叡山などで念仏を中心とする往生業を修している。

その信仰内容は、次にしめす通りである。

- (イ) 頼光は常に往生を願い、無言にして観念・観想の念仏に励み、往生を遂げた。〔第1話〕
- (ロ) 隆海律師は道心が深く、常に念仏を唱え、往生を願っていたが、臨終には念仏・西向・端坐して往生を遂げた。〔第2話〕
- (ハ) 和上明祐は一生の間、持齋にして戒律をたもち、臨終には念仏を唱え、往生を遂げた。〔第3話〕
- (ニ) 僧兼算は願恚をおこすことなく、慈悲深く、常に念仏を唱え、不動尊を念じ、臨終には念仏を唱え、阿弥陀の定印を結び、西に向って往生を遂げた。〔第7話〕
- (ホ) 僧尋静は正直で慈悲深く、叡山に十余年籠居し、昼は金剛般若經を読み、夜は念仏を唱え、臨終には念仏・西向・合掌して往生を遂げた。〔第8話〕
- (ヘ) 僧春素は「心直シク身淨クシテ、犯ス所無」く、日夜に念仏を唱え、往生を願っていたが、臨終には念仏・西向・端坐・合掌して往生を遂げた。〔第9話〕
- (ト) 僧明清は道心があり、日夜に念仏を唱えて往生を願い、臨終には沐浴・西向・端坐・合掌して往生を遂げた。〔第10話〕
- (チ) 僧境妙は法華經を常に読誦し、写經等の善根を積み、臨終には沐浴・西向・念仏して往生を遂げた。〔第12話〕

(1) 僧真頼は毎日三時に行法を修し、臨終には西向・端坐・合掌・念仏して往生を遂げた。〔第13話〕

(2) 千観内供は弥陀和讃を作り広めたが、「本ヨリ心ニ慈悲深クシテ、人ヲ導キ畜生ヲ哀ブ事無限シ。」臨終には願文を捲り、念仏を唱えて往生を遂げた。〔第16話〕

(3) 僧平珍は常に極楽浄土を觀想し、往生を願ひ、臨終には西向・端坐・合掌・念仏して往生を遂げた。〔第17話〕

(4) 僧増祐は常に仏道を修行し、一心に仏を念じ、經を讀んでいたが、臨終には念仏を唱え往生を遂げた。〔第18話〕

(5) 僧玄海は常に昼は法華經を讀み、夜は大仏頂真言を誦し、夢告の通り三年後に往生を遂げた。〔第19話〕

(6) 沙弥葉連は日夜に阿弥陀經を讀み、念仏を唱えて、往生を遂げた。〔第20話〕

(7) 僧広道は数十年の間極楽往生を願っていたが、夢告を得、予告通り往生を遂げた。〔第21話〕

(8) 勝如聖人は十余年間無言の行をしていたが、沙弥教信の教えにより無言を止め、念仏を唱えて往生を遂げた。〔第26話〕

(9) 入道真覚は「本ヨリ心直クシテ、邪見・放逸ヲ離タリ」毎日三時に西界および阿弥陀の法を行い、往生を遂げた。〔第31話〕

(10) 入道尋祐は「本ヨリ心ニ慈悲有テ、人ニ物ヲ施スル心尤モ広シ。」日夜に念仏を唱え、往生を遂げた。〔第32話〕

(11) (12) いずれの場合も、極楽に往生するため常に行業を修すという熱心な信仰態度がうかがえる。さらに注意すべきは、ここには（後述の）㉑にみられる悪人往生の事例はなく、(1)「一生ノ間、持齋ニシテ、戒律ヲ持テ破ル事無シ。」という和上明祐〔第3話〕や、(2)「心直シク身淨クシテ、犯ス所無シ。」という僧春素〔第9話〕の例から知られるが、往生のために善根を積むと同時に罪を造らないことが理想とされた。僅かな罪でも往生の障害になると信じられたからである。それを端的に示す説話を挙げよう。

葉師寺の濟源僧都は道心があり、「寺ノ別当也ト云ヘドモ、寺ノ物ヲ不仕ズシテ、⁽²⁹⁾常に念仏を唱えて往生を願っていたが、臨終に地獄の迎えを受けた。濟源がそのわけを尋ねると、鬼共は「先年ニ、此ノ寺ノ米五斗ヲ借テ仕タリキ。而ルニ、未ダ其ヲ不返納ズ。其ノ罪ニ依テ、此ノ迎ヲ得タル也」といったので、すぐに米を一石にして返済すると「火ノ車返テ、今ナム極楽ノ迎ヘ得タル」といって、濟源は無事往生を遂げることができた。〔第4話〕

『今昔物語集』の編者は、この話の後に「此ヲ思フニ、然許ノ程ノ罪ニ依テ、火ノ車迎ニ来ル。何ニ況ヤ、恚ニ寺物ヲ犯シ仕タラム寺ノ別当ノ罪、思ヒ可遣シ。」と記しているが、願生者たちは、たとえ僅かな罪であっても、極楽に往生するためには、その障害になると考えられる罪を造ってはならない（もし罪を造った場合は、それを解消しておかねばならない）と信じていたようである。

以上、要するに、往生するためには善根を積むとともに、持齋・戒律を守る、或いは罪を造らないという姿勢を示す者が多いのであるが、定心院の僧成意〔第5話〕の場合は、前述の明祐・春素〔第3・9話〕などとは異なる。

僧成意の往生説話については以前に論じたことがあるが、その信仰態度を要約すると——成意は「本ヨリ持齋ヲ不好ズシテ、心ニ任セテ朝夕ニ物ヲ食フ。」そこで弟子は、叡山の高僧たちは持齋しておられるのに、師は何故持齋されないのか、と問う。成意は「心菩提ヲ障フ、食菩提ヲ不障ズ」という経文を根拠にして「食ニ依テ、更ニ後世ノ妨ト不成」と答え、弟子を納得させる。すなわち、成意は、持齋・食は後世菩提に直接関係するものではないから、そのような形式に固執する必要はないと考えている。つまり、持齋・食という形式（外面的なもの）を否定し、心・信仰という本質（内面的なもの）を重視しているが、この成意のいき方は特異な存在であり、それは鎌倉仏教の先駆をなすものといえよう。⁽³¹⁾

II ⑩山林における修行者

⑩山林で修行する者は、前記の通り六名であるが、そのうち三名は、摂津国の樹上の人・北山の餌取法師・鎮西の餌取法師の修行や往生の有様を目撃する副主人公として登場するに過ぎず、その修行内容については明記されていない

い。往生説話の主人公（往生人）として登場するのは三名であり、④寺院で修行する者に比べて極端に少ない。その中で注目すべきは、次に述べる北山の餌取法師〔第27話〕と鎮西の餌取法師〔第28話〕である。

北山の餌取法師は、外面は肉食妻帯の破戒僧であるが、内面は「後夜に起き」仏ノ御前ニ居テ、弥陀ノ念仏ヲ唱テ行（フ）」という尊い修行者である。鎮西の餌取法師も、外面は「頭髮ハ三四寸許ニ生ヒテ綴ヲ着タリ、怖ロシク穢クテ更ニ可近付クモ非ズ。」という（肉食妻帯の）破戒僧であるが、内面は「夜中に」先ヅ法花ノ懺法ヲ行ヒツ。次ニ法花経一部ヲ誦シテ、礼拝シテ後ニハ弥陀ノ念仏ヲ唱フ。」という立派な修行者である。両法師の行為は、表面的には悪（肉食妻帯の悪行）と善（念仏・誦経の善行）の同居という矛盾した形を示すが、その内実は次の通りである。北山の法師の場合は「可食キ物ノ無ケレバ、餌取ノ取残シタル馬・牛ノ肉ヲ取り持来テ、其レヲ噉テ命ヲ養テ過ギ侍ル也。」とあり、殺生の罪を犯したわけではなく、悪行為とはいえない。鎮西の法師の場合は「弟子淨尊ハ、愚癡ニシテ悟ル所無し。人ノ身ヲ受ケテ法師ト成レリト云ドモ、戒ヲ破リ慙無シテ、返悪道ニ墮ナムトス。今生ニ榮花ヲ可樂 身ニモ非ズ、只、仏ノ道ヲ願テ、戒律ヲ持テ三業ヲ調ヘム事ハ、仏ノ教ヘニハ不叶ズ。分段ノ身ハ、衣食ニ依テ罪造ル、檀越ヲ憑（タマ）マムト思ヘバ、其恩難報シ。然レバ、諸ノ事、皆、不罪障ズト云フ事無シ。此レニ依テ、淨尊、世間ニ人ノ望ミ離タル食ヲ求テ命ヲ継テ、仏道ヲ願フ。所謂ル、牛・馬ノ肉村也。」とあり、罪深い凡夫の身を自覚・反省し、非僧非俗の形で仏道を求めるといふ実に謙虚な姿が示されている。その信仰態度は、法華経の意味内容を考えず、数量を重視し、盲目的に誦経に励んだ持経者などに比べ、はるかに宗教的である。（なお、両法師〔第27・28話〕とも、夜中に起き、ひそかに修行するが、前述の増賀聖人〔卷十二の32〕の名聞利養を嫌つての偽悪行為とは趣を異にするけれども、この場合、意識的に徳を隠していると考えられる。すなわち、注〔16〕に記した『摩訶止観』の教理に基づくものといえよう。）

III ©その他の修行者

◎その他、俗世間で修行する者、および修行場所が明記されていない者は、前記のように三十二名であるが、そのうち在家が十二名（不明が一名）で、出家十九名中、僧五名・沙弥三名・入道五名・尼六名であり、㊤寺院で修行する場合（僧二十名・沙弥一名・入道二名）に比べて、僧以外の修行者が多い。

先ず、僧（五名）についてであるが、その信仰内容はいかなるものであろうか。——(イ)観幸入寺は「幼ニシテ出家シテ」修行し、東寺の入寺僧となったが、「堅ク道心^{オシ}発ニケレバ」という内面的・宗教的な事情から、大寺の高僧の地位を捨てて、土佐国に行き、「偏ニ名聞・利養ヲ棄テ、聖人ニ成テ」修行した〔第14話〕とあり、(ロ)僧長増も「幼クシテ山ニ登テ出家シテ」立派な僧となったが、「世ノ無常ヲ観ジテ」叡山を去り、伊予・讃岐で乞食となつて念仏を唱え修行した〔第15話〕とある。両者ともに既成教団から離脱し、辺鄙な所に下つて仏道修行に専念している。(ハ)僧仁慶も「幼ニシテ山ニ登テ、出家シテ」修行し、「漸ク長大ニ成ル程ニ」叡山を去り、「京ニ出テ住ム……或ル時ニハ仏道ヲ修行セムガ為ニ京ヲ出テ所々ノ靈験ノ所ニ流浪ス」〔第11話〕とあり、第一章で取りあげた増賀聖人などの事例（叡山などの大寺を去り、山林に隱遁する）と類似している。ただし、増賀などは山林に隱遁する聖であるのに対し、観幸・長増・仁慶は、俗世間で修行する、あるいは乞食・遊行する聖であるといえよう。

そのほか、丹後国の聖人・鎮西の聖人は迎講や千日講をおこない、人々に尊ばれているが、この場合も市中にあつて庶民を教化する聖の性格を認めることができる。

次に、僧以外の修行者（沙弥・入道・尼・在家）について検討する。

①沙弥（三名）のうち、尋寂〔第29話〕と葉延〔第30話〕は、前述の餌取法師〔第27・28話〕と同様、外面は悪人（破戒僧）であるが、内面は尊い修行者である。すなわち、尋寂は妻帯の破戒僧であるが、夜中に持仏堂で法華経を誦し念仏を唱えるという修行者であり、旅の僧撰円に「弟子尋寂、年来、法花経ヲ誦シ、弥陀ノ念仏ヲ唱ヘテ、仏道ヲ願フト云ヘドモ、世難棄キニ依テ、此ク妻子ヲ具シタリ。然レドモ残ノ命幾ニ非ザルガ故ニ、偏ニ菩提ヲ期ス。」と告白している。葉延は「狩・漁ヲ役トシテ魚鳥ヲ食ト」する肉食妻帯の破戒僧であるが、夜中に持仏堂で誦経・念仏する修行者であり、同宿の無動寺の聖人に「弟子葉延、罪業ニ依テ殺生ヲ宗トシテ、慙ノ心無シト云ヘドモ、偏ニ心ヲ至シテ法花経ヲ誦シ、弥陀ノ念仏ヲ唱テ、極楽ニ往生セム事ヲ願フ。」と語っている。尋寂・葉延ともに破戒行為をせざるを得ない凡夫の身を自覚し、非僧非俗の姿で修行に励み、往生を遂げている。

なお、前記・葉延の告白を聞いた無動寺の聖人は「法花経ヲ誦シ、念仏ヲ唱フル、此レ無限キ功德也ト云ヘドモ、魚ヲ捕リ鳥ヲ殺ス、此レ極メテ重キ罪障也。何ゾ、如此ノ罪ヲ造ラ、忽ニ極楽ニ往生スル事有ラムヤ。此レ、只云フ事ゾ」と、（葉延の言葉を疑ったとある。一般には、無動寺の聖人が考えるように、いくら善根を積んでいても、殺生や肉食などの破戒行為をしていると往生はできないと考えられていた。しかし、葉延のように罪を造りながらも「偏ニ心ヲ至シテ法花経ヲ誦シ、弥陀ノ念仏ヲ唱」えるならば、極楽往生は可能と信じられたことは注意すべきである。

ちなみに、「一生ノ間、弥陀ノ念仏ヲ唱ヘテ、阿弥陀丸と呼ばれた教信〔第26話〕も妻帯の破戒僧であったが、念願通り往生を遂げている。『今昔物語集』の編者は「彼ノ教信、妻子ヲ具シタリト云ヘドモ、年来、念仏ヲ唱ヘテ往生スル也。然レバ、往生ハ偏ニ念仏ノ力也」と、妻帯という破戒行為をしても念仏によって往生できると強調している。

②右記（①沙弥）の事例のほか、日頃、殺生・偷盗などの悪業を重ねていた者が、のちに懺悔して極楽往生を遂げる事例が見られる〔第22話・雲林院の聖人、第47話・悪業を造り人〕。それについては、既に注（10）の拙稿（『今昔物語集』の悪人往生説話）に取りあげたので、要点をまとめると、——大部分の願生者たちは、極楽に往生するために日頃から種

々様々な善根功徳を積み、さらに悪業を造らないようにしていた(罪を造れば、日頃つんだ善根が取り消され、極楽に往生できなくなるからである)。しかるに、僅かではあるが、極悪人でも罪を悔い改めて出家し、念仏を唱えるならば往生は可能であると信じられた。なお、卷十九の(4)に極悪人、源大夫の出家・往生説話がみられるが、『今昔物語集』の編者は、源大夫が往生したことに關して「世ノ末ナルトモ、実ノ心ヲ発セバ此ク貴キ事モ有ル也ケリ」と称讚し、「実ノ心」を強調している。

さらに注目すべきは、丹波中将雅通〔第43話〕の信仰である。雅通は「心ニ非ズ罪ヲ造ケリ。人ニ伴ナヒテ春ハ山ニ入テ鹿ヲ狩リ、秋ハ野ニ出テ雉ヲ殺ス。如此ク罪ヲ造リ、榮花ヲ好ムト云ヘドモ、内ニハ道心有テ、常ニ世ヲ厭フ心有ケレバ、常ニ法花経ヲ誦シ」往生を遂げたが、藤原道雅は「彼ノ雅通ノ中将、生タリシ時、殺生ヲ宗トシテ榮花ヲ好シ人也。何ノ善根ニ依テカ、極楽ニ往生セム。若シ此ノ事実ナラバ、極楽(ニ)生レムト思ハム人ハ殺生ヲ宗トシ、榮花ヲ可好キ也」と誇った。ところが道雅は六波羅蜜寺で、ある老尼が「昨夜、夢に老僧が現れて『汝デ、更ニ歎ク事無クシテ、心ヲ專ニシテ念仏ヲ唱ヘバ、必ズ極楽ニ往生セム事疑ヒ不有ジ。彼ノ左近ノ中将雅通ノ朝臣ハ、善根ヲ不造ズト云ヘドモ、只、心ヲ直クシテ法花経ヲ誦セシ故ニ、既ニ極楽ニ往生スル事ヲ得テキ』と告げられた」と話すのを聞き、雅通の往生を信じたとある。極楽に往生するためには、善根を積み悪業を造ってはならないと考えられた当時、道雅の疑問は無理のないことであつた。しかし雅通は「心ニ非ズ」罪を造つたのであり、「内ニハ道心有テ」〔善根功徳を積むことはできないが〕、「心ヲ直クシテ」法華経を読み、往生を遂げたのである。『今昔物語集』の編者は、この説話の末尾に「極楽ニ往生スル事ハ、善根ヲ造ルニハ不依ズ、只、心ヲ直クシテ経ヲ誦シ念仏ヲ可唱キ也ケリ」と、善根功徳という外面よりも、心という内面(35)を重要視している。

③もう一つ問題にしなければならぬのは、尼および女人の往生である（尼は第36話、第41話、女人は第48話、第53話に連続して登場する）。その信仰内容は、左記のように、たいいていの者は念仏一行に徹している。

(7)小松天皇の孫の尼は世の無常を感じ、道心をおこし「偏ニ弥陀ノ念仏ヲ唱ヘテ、更ニ余（シ）モ無シ。」〔第36話〕

(イ)寛忠僧都の妹の尼は「常ニ世ヲ厭テ……只、弥陀ノ念仏ヲ唱ヘテ他念無ク、極楽ニ往生セムト願ヒケリ。」〔第37話〕

(ウ)伊勢国飯高郡の尼は「本ヨリ道心有（リ）……偏ニ弥陀ノ念仏ヲ唱ヘテ、極楽ニ往生セムト願フ」〔第38話〕

(エ)筑前国の流浪の尼は「常ニ弥陀ノ念仏ヲ唱ヘケリ。」〔第41話〕

(オ)彦真の妻は「若（ク）ヨリ道心有テ、……弥陀ノ念仏ヲ唱ヘテ、懃ニ極楽ニ往生セムト（願フ）」〔第48話〕

(カ)女の藤原氏は「本ヨリ心柔軟ニシテ慈悲有ケリ。常ニ極楽ニ心ヲ懸テ、日夜ニ念仏ヲ唱ヘテ、忘ル事無カリケリ。」〔第50話〕

(キ)近江国坂田郡の女は「心柔軟ニシテ因果ヲ悟リ、仏法ヲ信ジテ殊ニ道心有ケリ、日夜ニ極楽ヲ願テ念仏ヲ唱ヘケリ。」〔第53話〕

話

(7) (キ)の七名は、⁽³⁶⁾いづれも善根の数量よりも念仏を重要視している。そのほか、念仏を重視した例として、観峯威儀師の従童・滝丸は鳴滝の川原で往生を遂げたが、人々は滝丸が日頃何となく口を動かしていたのを思いあわせ、念仏を唱えていたのだと気づいた〔第54話〕とある。『今昔物語集』の編者は「此レヲ思フニ、賤ノ物ノ、故モ不知ヌ童也ト云ヘドモ、年来、極楽ヲ願ケル（ニ）ヤ、口ヲ動カシケルハ、念仏ヲ申シケルナメリ。」と記しているが、財力もない無知の下童でも念仏を唱えることによって往生できるということが示されている。つまり、前記の尼・女人の場合と同様、造寺・造仏、写経等の善根功德よりも念仏が重要視されている。

以上、要するに、沙弥・尼・女人などの信仰の特色として、善根功德の数量という外面よりも、心という内面を重視する、また称名念仏一行が中心になっているという点を指摘したが、鎌倉時代の法然上人・親鸞聖人の信仰（弥陀の本願、他力による）にまでは到達していない。すなわち、称名念仏中心であっても、自ら唱えた念仏の功德で往生しよ

うという自力の立場を超えていないのである。

おわり に

『今昔物語集』にみられる修行者の姿は多種多様であるが、本稿では、特に卷十二～卷十五の法華経靈驗譚・往生譚における修行者について概観した。つまり、それぞれ①寺院で修行する者、②山林で修行する者、③その他、俗世間で修行する者、および修行場所が明記されていない者に大別し、その信仰内容を検討することにより、大雑把ではあるが、法華経靈驗譚・往生譚にみられる修行者の実態をとらえ、整理することができたと思う。ただし、卷十六・十七の観音・地藏靈驗譚、あるいは卷十九の出家機縁譚などについては、全く触れることができなかった。それらについては別の機会に発表したい。

* 『今昔物語集』の引用文は、岩波書店刊・日本古典文学大系本に依った。

注

- (1) ① 『今昔物語集』における法華経信仰（『文芸論叢』第4号）、② 「『今昔物語集』に於ける往生思想」（『松柏』多屋頼俊先生退職記念特集号）、③ 『今昔物語集』卷十五の再検討」（『文芸論叢』第18号）、④ 「平安朝仏教説話集にみる観音信仰」（『大谷学報』第五十三卷第三号）、⑤ 「『今昔物語集』にみる地藏信仰」（『解釈』第二十一卷第九号）など。
- (2) 出家（七十一名）の内訳は、僧六十八名、尼二名（卷十二の30、卷十三の12）、沙弥一名（卷十二の29）である。なお、沙弥は妻帯の僧を指す。
- (3) 親や子など縁者のために法華経書写供養をおこなった例は、卷十二の25・26、卷十四の7・8・9にみられる。そのほか蛇身を受けた者や、蛇などの畜類のために法華経書写等の追善供養をおこなった例は、卷十三の42・43・44、卷十四の1・2・3・4・5・6にみられる。ただし、卷十三の42・44、卷十四の1・6（僧講仙・定法寺の別当・無空律師・国寺の僧）は八表

I V)に取りあげている。

- (4) 罪人を救うため、ことさらに罪を造って入獄した春朝持経者〔卷十三の9〕のほか、化他・布施行に励んだ者は、永興禪師〔卷十二の31〕・睿実持経者〔卷十二の35〕・陽勝仙人〔卷十三の3〕・理滿持経者〔卷十三の9〕・僧蓮照〔卷十三の22〕・基燈聖人〔卷十三の25〕などである。
- (5) 寺院と山林の明確な区別はむづかしいが、天王寺・法性寺・長樂寺・龍花寺・石山寺・龍苑寺・香隆寺・六波羅蜜寺・定法寺・国寺・醍醐寺・法隆寺・金勝寺・神奈比寺など(有名・無名の寺院の名前が明記されているもののほか、横川・東塔・西塔、あるいは比叡山と記しているものについても、寺院と判断し、㉔のグループに入れた。
- (6) 寺院以上に、山林の規定はむづかしいが、書写山・愛宕山・金峯山・大峯山・比良山・国上山・雪彦山・棚波滝・箕面滝などのほか、吉野の山寺〔卷十二の27〕、多武峯〔卷十二の33〕、神明〔卷十二の35〕、多々院〔卷十三の9〕など山寺といふべきものも㉔のグループに入れた。
- (7) 卷十二の31、34、36、38、40、卷十三の1、8、10、18、22、28、30、31、33、38、卷十四の6、12、24。以上、五十三話のうち、卷十三の2・11は各二例、従って合計五十五例。ただし、法華経読誦と書写〔卷十三の7、卷十四の6〕、法華経読誦と懺法〔卷十三の15〕は、注(8)に記した兼修と区別し、ここに含めた。
- (8) 卷十二の30・32・33・37、卷十三の9・19・20・21・29・32、卷十四の10・25。なお、以上の十二例のうち、法華経と真言の兼修は四例〔卷十二の37、卷十三の20・29、卷十四の25〕、法華経と念仏の兼修は三例〔卷十二の30・32・33〕である。
- (9) 法華経書写一例〔卷十二の28〕、法華講聴聞二例〔卷十三の42・44〕、法華経受持(読誦・書写など明記しない事例)三例〔卷十三の39・40・41〕、念仏一例〔卷十四の1〕、行業不明三例〔卷十二の27、卷十三の1・12〕、合計十例。
- (10) 拙稿『今昔物語集』の悪人往生説話」(『大谷学報』第六十卷第四号)参照。
- (11) ちなみに、㉔寺院で修行する者(二十三名)のうち「聖人」と呼ばれている者は二名〔卷十三の20、卷十四の25〕である。
- (12) 『高野聖』(角川新書三四～三五ページ)(なお、『増補高野聖』(角川選書79)には、唱導性を加え、八つの性格をあげておられる)。
- (13) 『高野聖』三五ページ(増補高野聖)三一ページ)。
- (14) そのほかに、(5)比良山の持経仙・(6)陽勝仙人・(7)僧法空も道心をおこし、本寺を離れるが、これらの場合は、いずれも仙人になることを願っている。

(15) 新潮日本古典集成本、六三ページ。

(16) 隠徳については『摩訶止観』巻七・下に

「もし名譽の羅網、利養の毛繩を被つて、眷屬が樹に集まり、^{ゴウ}蚊蠱が内に侵し、^{ワケ}枝葉が外に尽きなば、まさに早くこれを推つべし、受くることなく著することなかれ。推つるにもし去らずして^{カス}飄つて^{ツク}粘繋せらるれば、まさに徳を縮め瑕を露わし、狂を揚げ実を隠し、密かに金唄を覆つて盗をして見せしむることなかれ。もし、迹を遁すも^{ノガ}脱れずんば、まさに一挙万里し、絶域他方にしてあい諳練することなく、快く道を学ぶことを得ること、^{グナ}求那跋摩のごとくすべし。云云。」(岩波文庫本△下▽一四九ページ)

とあるが、増賀の場合、その教理に基づいていることは明らかである。

(17) その顯著な例は『発心集』第一の十〜十二に、三話連続してみられる(「天王寺聖、隠徳の事 付乞食聖の事」・「高野の辺の上人、偽つて妻女を儲くる事」・「美作守顕能家に入り来る僧の事」)。いずれの僧も、徳を隠したり、悪をよそおったりしているが、長明は、この一連の説話の後に「実に道心ある人は、かく、我が身の徳を隠さむと、過をあらわして、貴まれん事を恐るるなり。」(新潮日本古典集成本、八六ページ)と記し、隠徳を出家者の鑑と考えている。

(18) 弥勒信仰については、拙稿「平安朝に於ける弥勒信仰」(『国語と国文学』第四十八巻第一号)を参照されたい。

(19) 僧広清のほかに、尼願西は「法花経ヲ誦誦シテ其ノ義理ヲ悟ル事深シ。」(巻十二の30)とあり、龍苑寺の僧は「経ノ文義ヲ習ヒ悟テ、毎日ニ一品ヲ講ジテ、其ノ経文ヲ誦誦ス。」(巻十三の33)とある。

(20) 巻十五の説話題目をみると、極楽往生説話(五十二話)には「……往生語」^{セルゴト}がつけられ、兜率天上生説話(二話)には「……往生兜率語」がつけられている。つまり、△往生▽が巻十五の一貫したテーマであり、兜率天上生説話もその中に含めている点には注意すべきである。

(21) 出家(四十八名)の内訳は、僧二十九名(第1〜19、21、23〜30話。ただし、第1話(頼光・智光二名)、尼六名(第36〜41話)、沙弥六名(第20、26〜30話)、入道七名(第22、31〜35、46話)である。なお、沙弥は妻帯の僧、入道は俗人が後に出家した者を指す。

(22) 第1〜4、9、15〜17、20・22・23・26・27・32・33、36〜39、41、47〜50、54話。以上、二十五話のうち、第1話(頼光・智光、第26話(沙弥教信・勝如聖人)、第27話(北山の眞取法師・延昌)の三話は、各二例、従つて二十八例。なお、第1・17・23・38・49話などに、観念・観想の念仏がみられるが、そのほかは口称の念仏であり、後者が主流をなしている。その事

情については、拙稿『日本往生極楽記』と『今昔物語集』巻十五——観念の念仏から口称の念仏へ——（『大谷学報』第五十巻第三号）を参照いただきたい。

(23) 第28ノ30、34・40・42・44・45話。ただし、第45話は、法華経・念仏が中心であるが、他の善根も兼修している。

(24) 第6ノ8、10・18・53話。

(25) 第43・46話。

(26) 第11・12・19・35話。

(27) 第13・14・31・51・52話。

(28) 第5・21・24・25、28ノ30話。以上、七話のうち、第25話（撰津国の樹上の人・修行僧）二例、従つて八例。なお、第28ノ30話の主人公（鎮西の餌取法師・僧尋寂・僧業延）は念仏と法華経を兼修しているが、副主人公（修行僧・僧撰円・無動寺の聖人）については行業が明記されていない。

(29) 寺の別などが寺物・仏物を勝手に使用すること（寺物犯用・仏物欺用）がよくおこなわれたようである。例えば、卷十九の22に「恣ニ寺ノ物ヲ欺用シテ」いた別当は、麦縄を折櫃に入れて間木の上に置いたが、一年後に折櫃を開いてみると、麦縄は小蛇に化していたとあり、『今昔物語集』の編者は「仏物（欺用）ハ量無ク罪重キ物也ケリ。」と記している。同類話は多いが、話末に「仏物ヲ恣ニ欺用シテ、功德ヲ不修ズシテ此レヲ不償ザル事、極テ愚也。」（卷十三の44）、「仏物（欺用）ハ量無ク罪重キ物也ケリ。……仏物ヲバ、強ニ不貪ズシテ、人ニモ与へ、僧ニモ可令食キ也。」（卷十九の21）、「譬ヒ銅ノ湯ヲ飲ト云トモ、人、寺ノ物ヲバ不可食ズ。此レ（寺物犯用、極テ罪有ル事也）〔卷二十の21〕」などと記し、寺物犯用・仏物欺用をいましまめている。

(30) 「成意往生説話について」（『文芸論叢』第12号）

(31) 注(30)の拙稿・第三節に記した通り、『黒谷上人語燈録』などに、食という形式より、心・念仏などの本質を重視するいき方がみられるが、成意のいき方は法然上人の信仰の先駆をなすものである。

(32) 法華経読誦の数量を重視した事例は、第一章・三・II（一〇六ページ）に記したように、好延持経者をはじめ、理満・行空・基燈・蓮長などの持経者にみられる。

(33) この場合も、前述の餌取法師（第27・28話）と同様、夜中にひそかに修行しており、『摩訶止観』の隠徳の思想（注16）参照。

が働いている。

(34) 同類の事例は第46話にもみられる。すなわち、殺生を業とし、悪業を積み重ねた極悪人・阿武大夫は、のちに懺悔して頭を剃り、法華経を受持して兜率天に往生したとある。悪人が兜率天に往生する説話については、注(18)の拙稿を参照いただきたい。

(35) 外面より内面を重視した事例は『今昔物語集』巻十五の出典未詳説話に多くみられる。すなわち、先に取りあげた東寺の観幸入寺(第14話)や東塔の僧長増(第15話)など、道心をおこして既成教団を離脱し、辺鄙な所で修行に専念しており、形式より内面(もっといえばへん)を重視している。のちに取りあげる観峯威儀師の従童・滝丸も、財力のない無知の童であるけれども、念仏によって往生しており、善根の数量という形式ではなく、念仏という内面が重視されている。出典未詳説話のその他の事例については、注(1)③の拙稿を参照していただきたい。

(36) この七名のほか、源信僧都の母の尼は(平生の行業は明記されていないが)臨終に念仏を唱えた(第39話)、藤原佐世の妻は観想の念仏をおこなった(第49話)、伊勢国飯高郡の幡・加賀国の女は、常に阿弥陀仏に蓮華などを供養し、往生を願った(第51・52話)とあり、法華経読誦と称名念仏を兼修した尼釈妙(第40話)以外は、すべて弥陀信仰一色である。

〈補注〉

『今昔物語集』の場合、前述の通り、別所聖は僧明秀(巻十三の29)のみで、ほかは全て山林に隠遁している。ところで、いったん叡山などの官寺で出家した者が離脱し、別に修行の場所を求めて隠棲することを、研究者の間では再出家・二重出家と呼んでいる。その事例は『発心集』『閑居友』『撰集抄』などの中世説話集にみられるが、その背景はいかなるものであろうか。小稿で取りあげた増賀聖人の事例からも知られるが、周知のように叡山は俗世間以上に俗化・頽廃しており、その境界を離れるため隠遁したのである。鎌倉仏教の祖師と仰がれる法然上人や親鸞聖人が叡山で出家、修行しながら、頽廃した叡山に絶望し、離山した話は有名であるが、小稿提出後(初校の段階で)法然上人に関して注意すべき論文に触れる機会を得たので付記しておく。すなわち、渡辺貞磨氏は『文芸論叢』第23号(昭和59年9月)の『平家』源空・重衡対面の章段について「称名・授戒・観想をめぐる諸問題——」で『玉葉』建久二年九月二十九日の記事を取りあげ、その内容を五項目に整理し、「この資料は、「上人」という称呼と「名僧」という称呼とを明確に使われているという点でも、そして、その上人が名僧よりも一般には低く

見られていたということを示している点でも、（中略）きわめて重要な意義を有する。」（10（11ページ）といわれる。つまり、叡山を下りた法然上人は、いわゆる名僧（大寺院に所属する僧綱）ではない、その上人はあながちに（戒師として）貴所に参上すべきでないといふ非難されるなど、上人が名僧よりはつきりと低く見られており、日本仏教史の上からも注目すべきことである。いわゆる官寺あるいは官寺に準ずる寺院に所属していない者を一般に「聖」（ヒジリ）といわれるが、そういう意味で法然上人あるいは親鸞聖人は、（叡山という官寺から離脱したのであるから）まさにヒジリであったといえよう。なお、官寺を離脱したヒジリに対し、最初から官寺に属さない私度僧的なヒジリも存在する（西行などがその例である）。ちなみに、渡辺氏は右記の論文（25ページ注④）で指摘しておられるが、名僧と聖人（上人）を使い分けている事例は『今昔物語集』巻十五の⁹⁹（源信僧都の母の証）にも見出せる。『今昔物語集』あるいは中世説話集にみられる聖（ヒジリ）あるいは聖的性格については別の機会にまとめてみたいと思う。

（昭和六十年一月八日 補筆）